

## 序にかえて

本書は、平安文学における人物について、史実を踏まえて、あるいは、史実と照らし合わせて考察したものである。調査にあたっては、諸資料を参照したが、そこには、漢文で書かれた歴史書をはじめとする歴史資料（以下、史料と表記する）はもちろん、『栄花物語』や『大鏡』などの歴史物語、私家集をはじめとする歌集類なども含まれる。私家集は、文学作品として研究対象であるとともに、重要な資料でもある。そして、資料としての歌集類の価値は、史料に勝るとも劣らない。むしろ、史料に残らなかった、当時の〈生〉の声を伝える貴重な資料である。

平安期の女房文学のなかで、『枕草子』は一際輝いている。当意即妙を得意とし、男性貴族とも才知あるやりとりをする清少納言。その清少納言が心酔した中宮定子。そして、華やかな衣装描写。『枕草子』には、魅力溢れる女あるじを中心に、才気ある女房、男性貴族による、知的かつ雅な宮廷世界が描かれているようにみえる。しかし、華やかに見える定子の周辺が決して安穩としたものではなかったことは周知のことで、『無名草子』が、「その『枕草子』こそ、心のほど見えて、いとをかしうはべれ。さばかりをかしくも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず書き記したる中に、宮の、めでたく、盛りに、時めかせたまひしことばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて、関白殿失せさせたまひ、内大臣流されたまひなどせしほどの衰へをば、かけても言ひ出でぬほどのいみじき心ばせなりけむ」（二六七―二六八頁）と記したように、『枕草子』には、一見、中関白家の衰えが記されない。

かつては、このことが清少納言の人間性と結びつけられたこともあった。しかし、現在の日記的章段の研究は、三田村雅子氏が、明るい章段にあっても底流に「あはれ」を読み取ったこと<sup>(1)</sup>や、原岡文子氏が、定子不遇時の章段の方が「笑い」が多く描かれることと「をかし」の世界の構築との関わりについて論じたこと<sup>(2)</sup>を踏まえて進められている。史実としての不遇の定子と、作品からうかがえる華やかな雰囲気との間には、ある程度の距離が感じられるため、そこに清少納言の取捨選択や執筆意識を読み取る必要はある。その一方で、『枕草子』の描写に、どこまで清少納言の作為を想定できるのか、という疑問もあった。そこで、『枕草子』に記された男性について、登場の「場」と「質」、清少納言との関わりのある男性貴族の層、そして執筆意識について考察したのが第一編である。

ところで、実在人物を調査していると、作者や編者の立場や視点による描写の偏りに気づく。たとえば、『枕草子』では、あれほど魅力溢れる中宮として記される定子だが、『栄花物語』では「あはれ」が強調され、『大鏡』ではほとんど記されない。作者や編者の立場や視点が変われば、描写が変わるのは当然だが、もし、『枕草子』という作品が現存しなかったら、定子に対する評価や印象は、まったく異なっていたのではないかと思われるほどである。同時代に成立しても、立場や視点が変われば、描写や評価は変わるのであり、まして、歴史が定まった後代から歴史を振り返って記した評価や描写と、当代の評価との間には、かなり大きな隔たりが想定される。後代の評価で記された作品や資料だけではなく、同時代の評価や理解に近づけることができれば、今まで見落としていたものや、新たな読みが提示できるはずである。そこで、同時代の評価を探るための資料として、歌集、特に私家集に目を向けた。自撰他撰の別や、編纂という行為を経てはいるものの、それでも、私家集は当時の〈生〉の声をかなり伝えている。歌集にも散佚歌集は多くあるから、現在目にすることができるもの、という

縛りがあるとはいえず、私家集の持つ幅広い資料性は、決して史料に引けを取らない。近時、私家集は多くの注釈書が刊行されており、それを参考にしながら、私家集に記される人物や事柄を整理した。その結果、複数の私家集に名が記されながら、まとまった作品や資料として残っていないかったために、いままでほとんど注目や研究がされていなかった嬬子の文化圏の存在を提示することができた。当時、その人物や文化圏がどのような存在感を有したのか、どのような評価を受けていたのかを考察するために、私家集を中心に諸資料を調査したのが第二編である。歴史物語との比較対照が可能なくとも重要であるため、村上朝から後冷泉朝あたりまでを調査考察の対象とした。なかでも、和田律子氏が牽引してきた頼通の文化世界の研究は、近時とくに盛んで、本書第二編も、頼通が撰関だった時期の文化圏の考察が多い。

なお、本書では、一人の貴顕人物を中心として、仕える女房やそこに集う男性による、文化的文学的営為とその発信が認められる交流の場を表現することばとして、「文化圏」を使用した。このような〈場〉を表すことばとして、現在まで、「文化圏」「サロン」「小世界」などが使われており、統一をみない。より大きな領域を指す意かと考える「文化世界」の用語もある。「文化圏」は普通名詞だが、平安文学の研究、特に和歌研究においては、ある人物を中心とした、文学的な、あるいは、文化的なものも含めた、活動や交流の〈場〉としても使われてきたように思われる。本書では、文学も含めた、文化的営為の場として、「文化圏」とした。

文化圏の女あるじとして代表的なのは、中宮定子だろう。清水好子氏が、定子を「宮廷文化を創る人」と評した<sup>(4)</sup>ように、『枕草子』には、定子のさまざまな趣向（花を瓶に挿して觀賞したり〈二〇段「清涼殿の丑寅の隅の」〉、雪山を作らせたり〈八三段「職の御曹司におはしますころ」〉、五節の舞姫のかしづきの衣装を統一したり〈八六段「宮の五節出ださせたまふに」〉<sup>(5)</sup>）が記される。桜を瓶に挿して觀賞したことは、『古今集』（巻一・春上・五二）の良

房の歌を意識して〈場〉を設定したように思われるが、さらに、女房に詠歌を求め、定子の「語り」へと続く。そうした、文化の継承と発展、あるいは創造に関わる営為は、質の問題や規模の大小はあるにしても、貴顕人物を中心とした〈場〉では、おこなわれていたと考える。貴顕女性を中心とする場合、貴顕男性を中心とする場合と比べて、出入りする人物や、統率あるいは関係する分野が限られるが、それでも、貴顕人物の社会的立場、資質、嗜好、さらに、仕える女房の得意分野によって、貴顕人物を中心とした〈場〉では、文学的な営為のみならず、さまざまな文化的な営為が、日常的にもなされていたと考える。また、それぞれの文化圏には、ある程度の独自性も認められる。たとえば、漢詩文の知識も利用する定子の文化圏、音楽に関する記述が比較的多く残る延子の文化圏、など、である。多くの平安文学は、文化圏との関わりの中で生まれ、あるいは享受されてきた。文化圏の考察を積み重ねることは、平安文学の研究に益すると考える。

なお、貴顕女性を中心とした、女房の関わる文化的文学的な営みを研究したものととして、諸井彩子氏の近著<sup>(6)</sup>「氏は「サロン」と表現する」や、彰子の文化圏の論集が刊行されたこと<sup>(7)</sup>も触れておく。

『枕草子』は、定子の文化圏を鮮やかに描き出した作品である。『枕草子』の人物について考察を進めることが、文化圏を考察するきっかけとなった。いずれも、史実を踏まえながら、実在人物を中心に調査考察をおこなってきたが、人物や史実に興味を持ちながら作り物語を読むと、登場人物の描写や役割と、実在人物あるいは史実との関わりが気になる。作り物語は虚構の物語ではあるものの、古くから准拠論があるように、歴史との密接な関わりを持つ。本書は准拠について論じたものではないが、実在人物、あるいは史実は、作り物語の登場人物の描写に影を落としている。実在人物や史実を意識しつつ、作り物語の登場人物の描写や役割について、調査考察したのが第三編である。